

サクラ‘乙女東彼岸’の栽培記録

井上尚子・高山信明

広島市植物公園のサクラの植栽については、木が成長して密植状態になり、日が当たらない枝や病害に侵された枝などが増えてきた（写真1）。また、土壌が固まったり流出したりして、根が十分に養分を吸収できない状態が頻出してきた。そこでここ数年、樹勢が衰えた株の伐採と新しい苗の植栽、施肥、土壌改良、罹病枝の剪定などに力を入れ、樹勢の回復に努めている。しかし、樹勢が衰えた株の中には入手が困難な品種がある。なかでもエドヒガンの花付きが良い選抜品種‘乙女東彼岸’は、昭和50年代に名古屋市の名古屋園芸から導入したと伝わるが、現在は弘前公園と当園にしか株が残されていないという（2021年 公益財団法人日本花の会 結城農場長 田中秀明氏 私信）。そこで今回、‘乙女東彼岸’を保存するために接ぎ木苗を育苗することにした。また、元の株も幹が折れることを回避するため（株）みずえ緑地に委託してワイヤー支柱を取り付け、施肥や土壌改良を実施して樹勢を回復させるように努めた（写真1）。



写真1 胴枯れ病で、幹が元から大きく裂けている（乙女東彼岸）。

接ぎ木苗の育苗については、前任の佐藤技師からヤマザクラを台木にしてうまくいかなかったと聞いていた。そこで前出の田中氏にたずねたところ、エドヒガン系の桜は台木をエドヒガンにした方が良いと教わった。

（公財）日本花の会からエドヒガンの台木を12株購入して、これを接ぎ木苗の台木とした。また、前任者から引き継いだヤマザクラの台木6株も試してみることにした。さらに、当園で接ぎ木育苗に失敗した場合を考え、（公財）日本花の会に接ぎ木苗3株の育苗を依頼することにした。

接ぎ穂は2022年1月18日に採集し、一部を（公財）日本花の会に送付し、残りを濡れた新聞紙で包み、さらにポリビニール袋で包んで4℃の冷蔵庫内で接ぎ木実施日まで保管した。

接ぎ木は2022年2月24日に実施した。



写真2 ‘乙女東彼岸’の接ぎ木苗育苗の様子（写真では他の品種も混在している）。

接ぎ木した株は温室内の棚上に置き、接いだ枝が活着するまでは、高さおよそ80cmの不織布（パオパオ）のトンネルで覆って湿度を保った（写真2）。

2022年3月上旬、接いだ枝が発芽するのを確認した。3月14日に調査した時点では、エドヒガンに接いだ12本のうち9本が発芽していた。ヤマザクラに接いだ6本は、3本が発芽していた。

さらに3か月後は、エドヒガンに接いだ12本のうち7本が生存していた。ヤマザクラに接いだ6本はすべて枯れていた。

2022年12月現在、乙女東彼岸の苗は当園で接ぎ木した7株、（公財）日本花の会に依頼した3本の計10株を得ることができた。

接ぎ木に成功したのはいずれも台木をエドヒガンにした場合で、前任者と同じく、ヤマザクラを用いた場合は苗の育苗に失敗した。田中氏のアドバイス通り、「乙女東彼岸」の接ぎ木にはエドヒガンを台木として用いるのがよいことが分かった。